「母子相互作用の臨床応用に関する研究」の評価

評価委員 国 分 義 行

本研究班も再発足後2年を経過するわけであるが，いまだに各研究とも研究途上にあり，結論が出ていないので，その評価はできない。しかし現在までの研究の経過を拝聴できたことはまことに有難く，有意義であった。特に本研究班は母子相互作用に適する研究を多くの学際領域から進めていこうというユニークな研究班の構成をしたわけであるが，その意図するところが見事に花を開き，したがってすばらしい果実をみのらせるであろうことが予見されてきた。今回の第2回班会議を聞いても従来予想もできなかったことが小児科領域にもたらされた。たとえば大阪大基礎工学の曽我部正博氏らの「オタマジャクシの成長における密度効果」などは人間の子どもたちを被検者として観察することはいろいろな問題があって不可能に近いことであったが，動物実験によってそのような研究が可能であることを示すとともに密度関係が大きな意義を有することを知らされたし，東京大産業機械工学科の岩田氏らの「顔の表情による母子間コミュニケーションの定量的分析」では小児科医は過去において体験として認知していた子どもの顔の表情を科学的に分析することの可能性を示したものであって，この研究によって子どもに対して母親が表情により正しい対応ができるようになることを示していた。また北大教育学部の三宅氏は「新生児の泣きのタイプと乳幼児における情緒的発達，アタッチメントの関係」を心理学的に縦断的に追究し，母子の相互作用の重大であることを示した。これらは小児科学的研究に新しい研究結果を提供するものであって，これによってさらに新しい研究分野が開け，母子相互作用という概念にいろいろ新しい問題を提供してこの分野の研究が一歩一歩前進していくことが知らされて，この研究班の意義が極めて重要であることを知らされるとともに明年度の研究の発展に大きな期待がよせられた。